水俣エッセイ「複雑の中で生きる」

はじめに

二〇一一年三月一一日の東日本大震災と福島第一原発の事故から三年半以上が経ちました。京都に住んでいると、自ら求めていかない限り、被災地の情報が入ってくることは少なくなりました。しかし、復興は始まったばかりであり、特に福島第一原発の周辺地域の未来は不確かなままのように見えます。

当事者でもない自分として何ができるか思案しているとき、福島と水俣の間で盛んに交流が行われていることを知りました。福島の被災者が水俣を訪れたり、水俣病関連の団体で福島をテーマとした講演が行われたりしているのです。

両者は、「公害」「補償」「社会の分断」「風評被害」などの点で共通項があり、過去の教訓を今後の政策に生かすことができるのではないかと考え、水俣に取材に行くことを決めました。

水俣に行く前までは、水俣病に関連する団体や資料館で水俣の教訓を福島にどう生かすか、というテーマについて話を伺えば良い記事になると考えていました。しかし、実際に水俣に行き話を伺って、その一端に触れてみると、全くもって甘い考えだったと反省したのです。

論理的で整然とまとめることと、一人一人の当事者の文脈を踏まえつつ失礼のないようにまとめることを両立させることは、自分の技量ではとても不可能なことに思われました。

とはいえ、私たち編集員が水俣で経験したことを共有することは大きな意味があると考え、レポートやインタビューという形ではなく、水俣を訪れた私個人のエッセイという形でまとめることに決めました。微力ではありますが、読者の皆様に、集約などとてもしきれない、その「複雑さ」を伝えたいと思います。

水俣とミナマタ

前日に長崎県雲仙市の小浜温泉エネルギーで取材を終えた公共空間の編集員の三人は、早朝七時に小浜を出発した。フェリーを二回乗り継いで、きれいな海岸線を伝って天草諸島を縦断し、鹿児島県の阿久根市から北上して、水俣市に到着した。

水俣市の第一印象は、日本全国どこにでもある地方の小さな街だった。全国チェーンの小売店と、海と山が隣接する美しい風景が混在するばかりで、水俣病の爪痕がすぐに飛び込んでくることはなかった。

私たちが最初に向かったのは、水俣病センター相思社が運営する「水俣病歴史考証館」である。街を横断する国道から折れてかなり奥に入った小高いところに歴史考証館はあった。私たちを出迎えてくれたのは、三〇歳前後の若い女性職員である永野さんだった。簡単ではあるが、わざわざ食事まで用意して歓迎して頂いた。

まず案内されたのは、相思社の歴史が詰まったお仏壇であった。亡くなった患者と並んで、実験で死んだ猫の位牌も祈りの対象となっていた。お仏壇で線香を上げて、水俣病がふっと近くに感じたのである。

永野さんは、相思社が結成された経緯、水俣病の歴史などについて、淡々とした口調ではあるものの、強い重みをもって語ってくださった。よく聞き手は話しやすいように相槌を打つべきというが、水俣病の話の重さを前にしたとき、軽々に「なるほど」などと頷くのは憚られた。私たちが事前に伝えていたことは、水俣病によって分断された市民の関係性をどうやって修復するか、ということであった。そうした目的を持って、水俣では「もやいなおし」という取り組みがなされてきた。永野さんのお話を聞いて感じたことは、捻れた関係は幾重にも積み重なり、絡み合い、美しい「もやいなおし」のストーリー

は表面をなぞった幻想でしかないということであった。

相思社の水俣病歴史考証館

私たちは「よそもの」であり、「観察者」である。よそものは、水俣のある一面を切り取って、「ミナマタ」として認識する。もやいなおしを通じて私たちが聞きたかった話は、「ミナマタ」であって水俣ではなかったのである。

公害問題としての「ミナマタ」は、被害者である水俣病患者と、加害者であるチッソという対立点が明確に描かれる。日本全体が高度経済成長の波に乗っていた時代の象徴がチッソであり、その犠牲者が水俣病患者だという歴史的背景が加わる。教科書に四大公害病として載るのはミナマタなのである。

水俣病の歴史

水俣病の初期の患者の多くは、水俣病が発生する以前、天草 諸島より移住した漁民であったと聞いた。不知火海でメチル水銀が生物濃縮された魚を多く食べる彼らで、症状が顕在化した。地域のお殿様的存在であるチッソに賠償を求めることは、元々の住民と漁民の間に大きな溝を生むようなものとなったのである。

水俣病が公害として全国的に報道されるようになってから、水俣出身の人たちは、水俣の外の社会から差別を受けることになる。穢れた特殊な存在として認識されたのかもしれない。外部からそうした差別を受けた水俣市民にとって、声高に水俣病を叫ぶ「患者たち」は、問題を増幅するような、邪魔な存在に映ったのも分かるような気がする。

しかし、水俣病の症状は漁民だけに留まらなくなる。自分は水俣病ではないと思い患者を差別していた人たちにも、症状が広がっていき、はっきりと割り切れない状態に進んでいく。水俣では、自分の家族や友達といった身近なところにチッソの職員がいて、水俣病の症状が現れる人がいるようになる。

症状が現れると一口に書いてしまったが、簡単に判別できるものでは全くない。メチル水銀を原因とする神経疾患である水俣病は、その現れ方、程度ともに多岐にわたると聞く。母親の胎盤を通り抜ける胎児性水俣病も存在する。比較的軽度の場合には、他の病気と区別することが容易ではなく、症状を自覚したけれど、それが水俣病だと言いづらい雰囲気があり、それがより一層患者を苦しめることになった。

現在では、製造過程で無機水銀から副生されたメチル水銀が含まれる工場廃水が原因となって、神経系の疾患が生じることが水俣病の見解として定まっている。

歴史を辿ってみたい。チッソが一九三二年に無機水銀を使用してアセトアルデヒドを製造しはじめた。一九五〇年代で水俣病の存在が顕在化し、五六年にいわゆる公式確認されてから、六八年までチッソの工場廃水は不知火海に流され続ける。なぜ六八年だったのか。科学的な見解が定まったからなのか。同じ年、チッソは、従来の製造方法から、無機水銀を使用しない、新しい製造方法を確立して切り替えている。

水俣病の「患者」には、認定患者と未認定患者がいる。未認定の中にも、申請して認定され

なかった人、自分が水俣病だと認識していない人、水俣病の症状が出ているが、自分や家族がチッソの職員であったり、それまで差別していた経緯があったりして敢えて申請しなかった、できなかった人もいる。

患者、被害者、認定基準、未認定患者、裁判、被害者手帳、救済、賠償金、見舞金、一時金、和解金…水俣病がこれまで辿ってきた経緯で使われてきた言葉たちだ。水俣に関わる一人一人にそれぞれの文脈があり、それぞれの人生がある。二十を越える裁判がある。チッソの態度や国の判断も一定ではない。立場により見え方が異なるから、「水俣病の概要」など言えるべくもない。

分かったと言ってほしくない

「もやいなおし」は、そうした複雑に積み重なった社会の分断を紡ぎなおそうという取り組みである。私たちがミナマタを観察したとき、それは「良い」ことのように思える。しかし、水俣病に関わる一人一人の目線にたち、文脈を踏まえようとした時、それは必ずしも「良い」ことではなくなる。永野さんに水俣病の解決は何かと伺ったとき、それは「一人一人違う」という答えが返ってきた。ある人は怨みから解放されることであるし、ある人は一人間としての心あ

取材に答えてくださった、永野三智氏

る謝罪なのかもしれない。ある人は反対に怨み続けることであるかもしれない。水俣病は、病気として慢性的な疾患と付き合い続けると同時に、水俣病によって複雑さを増した社会と向き合い続ける道のりだと思うと、言葉を継ぐことができなくなる。

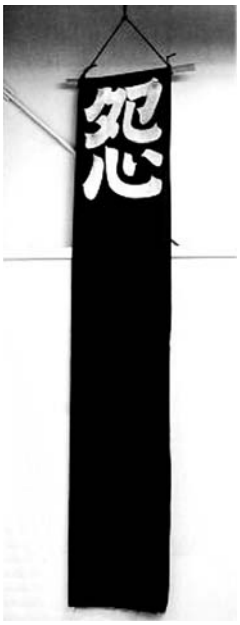
取材の最後に永野さんがおっしゃった言葉が脳裏に強く焼き付いている。

「簡単に分かったと言ってほしくない」

ミナマタを見に来る私たちは、きれいな物語だけを見に来て、予想通りの「分かった」を吐いて帰っていないだろうか。当事者でない私たちにとって、水俣を「分かった」などと言うことはできない。自分が全然分からない人間だということを認識することが、わざわざ時間を割いて頂いた永野さんの恩に報いる第一歩なのかもしれない。

水俣病の展示

永野さんの取材を終えた後、水俣病歴史考証館を見学した。歴史考証館の建物は、生業を失った漁民がなんとか収入を得ようとして作られたキノコ工場を改装したものだ。歴史考証館という名前には、水俣病が過去に終わった出来事ではなく、現在進行形のものだという意味が込められている。考証館は、チッソと闘った人々の気持ちが痛いほど伝わってくるものが多く展示されている。中でも、真っ黒な旗幟に白く染め抜かれた「怨」の文字は、患者たちの思いが染み込んだ重さを静かに語っていた。



考証館の次に訪れたのは、水俣病資料館だ。考証館が民間である相思社の施設であるのに対し、水俣病資料館は水俣市の施設である。

水俣病資料館は、チッソが廃水を流した水俣湾を埋め立てた「エコパーク水俣」の一角に位置する。資料館はコンクリート打ち放しの二階建ての近代的な建物で、水俣病にまつわる展示のみならず、環境教育・公害問題全般を学ぶことができる場所だ。

資料館は水俣病の長く膨大な事実関係が分かりやすく整理されている。前半の水俣病の被害を感じるような展示に始まり、少しずつ水俣病から立ち直っていく経緯が分かる展示になっているように感じた。ただ、プリンタで印字されたポップ体やゴシック体の印字が、水俣病を遠い存在のように感じさせられる一面もあるように思ったが、それは仕方がないことなのかもしれない。

水俣病資料館を見学した後、歩いてエコパークを散策した。エコパークは、資料館などの学びの施設に加えて、野球、ソフトボール、陸上、サッカー、テニス、グラウンド・ゴルフといったスポーツ施設、バラ園、日本庭園、道の駅などが併設された施設だ。海沿いには親水護岸が設けられ、水俣慰霊碑が建つ。波が打ち寄せる親水護岸は四五〇メートル超の遊歩道になっていて、一度は汚れた水俣の海が再生した象徴的存在だと思わせる。

エコパークの親水護岸

水俣から熊本へ

エコパークは広大で美しい場所であるが、どこか物寂しさを思わせる静けさが同居する場所でもあった。エコパークを最後に、水俣市を後にした私たちは、九州新幹線と肥薩おれんじ鉄道線が通る、ブラインドのような奇抜なデザインの新水俣駅を通り過ぎて、二時間車を走らせて熊本市に到着した。

熊本大学は広いキャンパスに木が生い茂り、そこかしこに学生の自転車が駐輪している様子が、どこか京都大学に似ている。熊大では、社会文化科学研究科准教授の石原明子先生にお会いした。石原先生は、紛争解決・平和構築学を専門にされていて、水俣や福島の再生にも尽力されている。

先生行きつけのコーヒー店で行った取材は、三時間を超えるほどで、ご多忙なところ熱く語って頂き本当に有り難い経験となった。

社会文化科学研究科は、京大公共と同じ専門職コースをもつ研究科である。先生がコース長をつとめる交渉紛争解決・組織経営専門職コースは、人事マネジメント、ＡＤＲ(裁判外紛争解決手続)、医療事故、非行・いじめ、損保会社での加害者の代理交渉人、司法書士、政治などの、ありとあらゆる身の回りの紛争や葛藤に取り組む社会人が学ぶ大学院コースである。

紛争解決と平和構築学は対になっていて、紛争と平和の関係は、症状と健康の関係にも似ている、という。紛争はその背景にある社会構造や蓄積された人間関係が表出したものと捉え、根本的な原因を発見して変容させることで、平和な状態をつくることを目指す学問である。

石原先生は、研究者として紛争解決・平和構築学から福島や水俣を研究するだけでなく、福島の被災地の若手リーダーを水俣市に呼んで交流する「ふくしまの今×みなまた」という紛争変容支援プログラムや、授業の一貫で学生に水俣でのフィールドワークの機会を設けるといった実践的な活動を両立されている。

石原明子准教授

イカの刺身

一九歳のとき、東京で開催された水俣展に関わったのが石原先生の出発点だった。その準備で水俣に初めて行き、水俣病患者の一人である緒方正人さんの家に上がったという。

寡黙な緒方さんが差し出したイカの刺身の味が全てを教えてくれた、と先生は語る。そのイカの刺身は、それまで食べてきたイカと違って、新鮮でコリコリしていて美味しかった。不知火海で採れた水俣のイカを食べたとき、水俣病でいかに豊かな水俣の自然やいのちが失われたか、それを生業にしていた漁師さんの生活、理屈でなく大切ないのちの意味を感じた。

イカの刺し身を出してくれた緒方さんは、元々チッソ相手に戦う患者の先頭に立っていたが、活動の最中に哲学的な変容が生じ、「私はチッソであった」という言葉を残した人だという。闘い続ける中で、普段自分が使っているものにチッソの製品が使われていることに気づいたり、自分がもしチッソの職員として生まれたらどのように行動をしていただろうかと考えたりしたと聞く。一方的にチッソを悪者とするのではなく、文明の問題として水俣病を捉え、人間の罪として反省する。緒方さんは、戦う構図ではなく、赦しながら、同じ問題が起きないようにするという運動に向かっていった。

怒りも赦しも強烈な水俣の経験が、石原先生の原点になっていることを知り、自分にはそんな感受性があるだろうか、人生を変えるような経験があっただろうかとふと考える。

水俣と福島

東日本大震災が起きた年の夏に被災地へ行った石原先生は、福島で厳しい現実を見たという。福島では、原発事故の影響を巡って夫と妻や親友との間で亀裂が生じたり、避難区域の線引きの問題があったり、放射能汚染だけでも言葉にならない被害なのに、人間関係の分断も重なってしまったら、とんでもないことだと感じたという。石原先生は、それをきっかけに福島のコミュニティや家族の葛藤解決や分断解決の支援の仕事に取り組むことになる。

水俣を訪れた福島の被災地の人々は、複雑な状態に置かれている経験を共有しているために、どのような分断の状況におかれているのか説明せずとも、お互いに察し合えるという。「がんばってください」ではなく、「一緒にがんばろうね」と声をかけられる。

複雑系を受け止める

当事者でなく体験を共有していない私たちは、複雑に積み重なった問題から、各々に分析を加えて論点を抽出する。それに対して調べたり考えたりしたことに基づいて、解決策を提示する。解決策は問題ごとに切り分けられていて、その範囲では論理的に整合性がついているように思えるものばかりだ。

しかし、水俣や福島のような、複雑に積み重なった分断に身をおいている人にとっては、その解決策全てが自分にあてはまることだけれど、何かピントがずれているように感じられるのだろう。

そうした外部者が考える解決策は、「問題」が発想の起点となっている。しかし、水俣や福島の複雑系においては、一人一人の文脈や置かれている状況を起点に考える必要があるのではないかと感じる。

水俣病や原発事故に限らず、ある面では整合性がついているものの、違う面では矛盾や混乱をきたすような構造はますます増え、その二者あるいは複数の選択肢がトレードオフに陥るような状況が頻発している。そうした状況を回避し、より深いところにある紛争の原因を突き止めて解決することが、これからの公共政策にとって非常に重要になってくると考えさせられる。

永野さんの「簡単に分かったと言われたくない」との言葉も、こうした複雑系を踏まえずに出した単純な答えは軽すぎるという意味なのだろうと感じる。

卑近な話で恐縮だが、似た感情を抱いた経験を思い出した。私はいわゆる限界集落で活動しているのだが、初めて集落に来た人に、軽々に六次産業化が大切だとか、田舎の友人がいてよく知っているだとか、獣害が大変ですよねだとかと言われると、なぜだかとても不愉快な気分になることがあった。まだほんの一端に触れたに過ぎない自分ではあるし、謙虚な姿勢を忘れてはいけないが、そんな簡単に分かった顔をされたくないと思ったのだろう。

合理性の幅

石原先生と話して最も学んだことは、合理性にも幅があるということだった。合理性は絶対的なものではなく、同じ物事であっても、どの部分に着目し、どこに価値付けるかによって、合理性には幅が生まれるという。

ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックは、合理性には、科学的合理性と社会的合理性があると主張する。

「社会的な合理性によって裏付けられていない科学的な合理性は無意味であり、科学的な合理性のない社会的な合理性は盲目なのである。」

違う次元にいてお互いを非難しあい、どちらが正義だと争うことほど虚しいことはない。合理性にも幅があり、正義にも幅があるのだと思う。それぞれの文脈ごとに、合理性や正義があることを認め合うことが、複雑の中で生きていくために必要な第一歩なのではないだろうか。

（文責　森　俊貴）